

**世界の人びとのための J I C A 基金活用事業
終了時活動報告書 (2024 年度採択案件)**

1. 業務の概要	
(1) 案件名	ベトナムの孤児院における学力及びソーシャルスキル向上支援
(2) 実施団体名	特定非営利活動法人 新潟国際ボランティアセンター(NVC)
(3) 実施期間	2025年1月6日～2026年1月5日
(4) 実施国	ベトナム社会主義共和国
(5) 活動地域	ラムドン省ダウアイ地区マダグイ市
<p>(6) 活動概要</p> <p>①活動の背景： ベトナムは近年、経済成長が進んでいる一方で、貧富の差が広がり、今も育児放棄や孤児の問題が続いています。南部ラムドン省にあるマダグイ子どもセンターは、孤児や困窮家庭、少数民族の子どもたちを受け入れ、生活と学びの場を提供している施設です。現在、0歳から18歳までの子ども60名が暮らしており、そのうち13名は障がいを持っています。設立当初は幼かった子どもたちも成長し、就学にかかる費用が年々増え、すべての子どもを学校に通わせることが難しい状況です。さらにコロナ禍の影響で収入源が途絶え、現在も施設運営は不安定な状態が続いています。子どもたちが将来、自立して社会で生きていくためには、施設での安定した教育環境づくりと、学力やソーシャルスキルを育てる支援が必要です。</p> <p>②活動の目標： 本事業では、まず孤児や貧困状態にある子どもたちに教育支援を行い、就学年齢の子ども全員が学校に通えるようにするとともに、安心して学べる環境を整え、学力向上を目指しています。あわせて、パンデミック前に導入していた線香や数珠球（ビーズ）の製作機械を修理・再稼働し、ものづくり学習を再開することで、子どもたちが仲間と一緒に作業し、技術だけでなく、協調性や対人関係といったソーシャルスキルを身につけることを目的としています。さらに、製作した成果物を施設の収入源とすることで、施設の自立的な運営を後押しします。加えて、成果物を当団体が買い取り、日本で販売することでフェアトレードを推進し、活動の認知拡大と国際理解の促進につなげます。また、デザインや加工、販売の工程に新潟の引きこもりの若者にも関わってもらい、日本とベトナム双方の社会課題解決を目指しています。</p>	

2. 業務実施結果

(1) 実施した内容

1. 教育事業

【活動内容】

- 1) 就学支援**：就学児童に対し学校に支払う学校費、教科書代、給食費（幼稚園児のみ）を支援しました。
- 2) 学力向上のための学習教室**：定期的な学習教室を開催しました。主に学校学習の復習を行い、授業に遅れがちな子どもをサポートしました。

◆実施内容

- 就学対象児童が学校を中途退学することなく継続して通学していることを確認するとともに、各学校における成績評価を定期的に確認しました。
- 学習教室が定期的実施されていることを確認するとともに、参加児童の出席状況および学習理解度・進捗状況について継続的に把握しました。施設では、日常的に高学年の生徒が低学年の子どもたちを指導する体制が整っており、学習教室は平日夕方にはほぼ毎日開催されました。学校の予習・復習に加え、学習が苦手な子どもへの個別的なフォローアップも行われています。

2. ものづくり学習

【活動内容】

- 1) 線香製作**：比較的、簡単な作業のため、低学年児や障がいを持つ子ども達も作業を行いました。
- 2) 数珠球(ビーズ)製作**：中高生の男児が中心となり研磨機等の機械を扱う作業を行いました。数珠球(ビーズ)を使ったプレスレット製作は低学年の子ども達も行うことができました。

◆実施内容

- 数珠球（ビーズ）製作機械の部品交換等の修復を行い、コロナ禍以降停止していた「ものづくり学習教室」を再開することができました。あわせて原材料費を支援することで、安定的にものづくり学習を継続できる環境を整備しました。
- 専門知識を持つ講師を雇用し、製作技術の向上および作業効率化に関する指導を実施しました。併せて、作業工程における安全管理も行い、安心して学べる体制を構築しました。
- マダガイ子どもセンターで製作した数珠球(ビーズ)を当団体が買取り、日本で天然石アクセサリーに加工し販売しました。アクセサリーのデザイン考察や製作には、新潟市内の大学生、留学生、そして引きこもりの若者が作業を担いました。
- 当団体において買い取った数珠球（ビーズ）の品質検査を実施し、その結果を現地施設へフィードバックしました。アクセサリー製作・販売を通じた日本市場の動向や、消費者ニーズに基づくサイズや色等について現地スタッフに指導しました。
- 2025年8月に現地を訪問した際に、新潟の青年とマダガイ子どもセンターの子ども達によるワークショップを実施しました。数珠球（ビーズ）の品質向上を目的とした意見交換および、ビーズを用いたアクセサリー製作ワークショップを開催し、相互理解と技術向上を図りました。

(2) 実施成果：

◆教育支援

1. 子どもたちの学力向上および貧困からの自立支援

本事業の実施により、マダガイ子どもセンターに在籍する就学年齢の児童全員が学校に通学できることができ、適切な教育環境のもとで学力向上を図ることができました。あわせて学習教室を開設・継続することで、学習の遅れや中途退学を防止し、低学年の段階から基礎学力の定着を促進しました。

その成果のひとつとして、高校生の中から大学に合格する児童が生まれ、これまで学力不足や生活困窮を理由に進学を断念していた子どもたちにとっても、高校・大学進学が現実的な目標になり、子どもたちの学習意欲や自己肯定感が向上しました。

2. 施設における生活環境の改善

教育費の支援により、施設が医療費や食費等の生活費を削減して学費を捻出する必要がなくなり、子どもたちの生活環境の安定および質の向上につながっています。

◆ものづくり学習

1. 子どもたちの社会的基礎力の育成

ものづくり学習を通じて、子どもたちは仲間と協力して作業に取り組み、協調性や向上心を育てています。製作の技術だけでなく、作業の進め方や人との関わり方など、将来社会に出て生活していくために必要な基礎的な力を身につける機会となっています。

2. 施設の経済的自立に向けた取り組み

製作した成果品を日本及びベトナムで販売することで、施設運営費の一部を自らの収益で補うことが可能となり、経済的自立に向けた第一歩となっています。また、作業工程の管理やベトナム国内での販路拡大に現地スタッフが主体的に関わることで、施設のエンパワメントを促進し、事業の継続性および発展性の向上を図りました。

3. 新潟の若者の人材育成

ベトナムの子どもたちを支援する本活動は、新潟の若者の成長にもつながっています。大学生、留学生、引きこもり状態にあった若者が立場や背景の違いを越えて協力し、アクセサリー作りやイベント・ワークショップの企画と運営に共に取り組んでいます。こうした協働の場を通じて、若者同士が互いに学び合い、コミュニケーション力や責任感、社会参画への意識を高める機会となっています。また、国際支援に関わる経験が、自身の将来や社会との関わりを考えるきっかけとなり、若者の自立や成長を後押ししています。

(3) 得られた教訓など：

1. 教育の継続的支援は、子どもの将来像を大きく変える

就学の継続と学習教室の実施は子どもたちの学力向上につながっています。施設の高校生の中から大学合格者が生まれたことは本事業の大きな成果であり、適切な学習環境と継続支援があれば、困難な状況の子ども達も進学を目指せることが確認されました。

2. ものづくりは、学びと自信を育てる有効な手段となる

ものづくり学習を通じて、子どもたちは技術だけでなく、協調性や責任感、達成感を身につけています。成果が形として見えることが、自信や意欲の向上につながり、学習や生活全体への前向きな姿勢を生み出しています。

3. 支援は「与える」だけでなく「循環」させることで持続可能になる

現地で製作した数珠球（ビーズ）を日本で加工・販売し、収益を再び支援に還元する仕組みは、施設の経済的自立を後押しするとともに、支援の継続性を高める結果となりました。

4. 支援活動は関わる人すべての成長を促す

ベトナムの子どもたちへの支援活動は、新潟の大学生や留学生、引きこもり経験のある若者にとっても、社会とつながり、自身の役割や居場所を見つける貴重な機会となりました。また、本事業を通じて協働した現地施設スタッフとは、さまざまな意見交換や議論を重ねる中で、1年を通して信頼関係と絆が深まり、施設のエンパワメント促進にもつながりました。このように本事業では、支援する側・される側という一方向の関係ではなく、相互に学び合い、共に成長していく関係性を築くことの重要性を再確認しました。

（４）今後の活動・フォローアップの方針：

1. 教育支援の継続と個別フォローの強化

就学の継続および学力向上を最優先課題とし、学習教室を安定的に運営するとともに、就学支援を継続して実施します。大学進学が決定した生徒については、当団体の他事業である奨学金事業と連携し、通学や生活に関わる支援を引き続き行う計画です。大学合格を最終的な目標とするのではなく、子ども一人ひとりの状況に応じた切れ目のない支援体制を整え、社会に出て自立するまで継続的に伴走することが、当団体の強みです。

2. ものづくり学習の質の向上と安全管理の徹底

線香・数珠球（ビーズ）製作における技術指導を継続し、品質向上と作業効率の改善を図ります。あわせて、講師や現地スタッフによる安全管理体制を維持・強化し、安心して学べる環境を整えます。

3. 循環型支援モデルの安定運用と販路拡大

現地での製作と日本国内での加工・販売をつなぐ循環型の仕組みを安定的に運用するとともに、イベント出店やオンライン販売を通じて販路を拡大し、施設の経済的自立を引き続き後押しします。

4. 国内外の若者が関わる人材育成の継続

新潟の大学生、留学生、ひきこもり経験のある若者が継続的に関われる仕組みを整え、企画・運営への参画を促します。支援活動を通じた就労支援・社会参加の機会を今後も創出していきます。

5. 成果の可視化と情報発信の強化

マダガイ子どもセンターから大学に合格した生徒が出たことやワークショップの実績など、事業成果を整理・共有し、支援者や地域社会への情報発信を行うことで、事業への理解と共感を広げ、長期的な支援基盤の強化につなげたいと考えています。

3. その他(エピソード・感想・写真など)

(1) 活動中のエピソード・感想など

本事業は 1 年間を通して計画どおりに実施され、着実な成果を上げることができました。なかでも、ベトナムおよび日本の双方において、事業に関わった若者たちの成長が見られた点は特に印象的でした。

《マダグイ子どもセンター》

Phạm Văn Đức (ファム・ヴァン・ドック) 君 (17 歳) は、両親がともに病気のため、幼い頃からマダグイ子どもセンターで生活しています。数珠球 (ビーズ) 製作のものづくり学習教室が再開されたことを大変喜び、放課後の時間を使って熱心に技術向上に励んでいます。新しい知識や技術を身につけることにやりがいを感じていると話してくれました。また、Trương Tấn Phát (チュオン・タン・ファット) 君 (15 歳) は、幼少期に路上をさまよっていた孤児です。数珠球 (ビーズ) 製作のものづくり教室を通して働く喜びを知り、将来はビーズ製作の会社を立ち上げたいという夢を語っています。このように、困難な生い立ちを持つ子どもたちの生きがいや将来の夢を支援することができます。さらに、Nguyen Thi Yen Nhi (グエン・ティ・イエン・ニ) さん (18 歳) が大学に合格したことは、当団体にとっても大きな喜びであり、継続した教育支援により安定した学習環境を提供してきた成果といえます。彼女の存在は施設の子どもたちにとって良い模範となり、将来の可能性を広げる励みになると考えています。

《新潟の若者たち》

当団体で活動する大学生は自ら企画しキャラバン隊を結成し、地域のイベントや東京で開催されたグローバルフェスタ等のイベントに積極的に参加しました。マダグイ子どもセンターで製作された数珠球 (ビーズ) を使ったアクセサリー作りのワークショップを日本国内において、2025 年 4 月から 12 月までの間に延べ 9 回開催しました。これらのワークショップを通じて、アクセサリー作りを楽しみながら、現地の現状や当団体の活動についての理解と認知を広げることができました。

引きこもり経験のある A さん (30 歳) は、もともと手先が器用なこともあり、アクセサリー作りやワークショップの講師として活動に関わっています。これまで人との関わりが苦手だったそうですが、講師として人に教える経験を重ねる中で、その楽しさや難しさを学んだと話しています。また、アクセサリー作りをきっかけに、いろいろなことに興味を持つようになり、もっと多くのことに挑戦したいと思うようになり、今では別のボランティア活動にも参加するようになりました。このように、社会とのつながりが深まり、将来に向けた前向きな気持ちが育っていることは、大きな成果だと感じています。この取り組みを通して、新潟の大学生、留学生、引きこもり経験のある若者が同じ目的に向かって協力し合い、互いに学び合いながら成長する姿は、本事業の目的のひとつであり持続可能な活動を続けていく上で重要であると感じています。

(2) 活動の写真



マダガイ子どもセンターの子ども達



学習教室の様子



数珠球(ビーズ)製作教室



ものづくり教室に参加する Phạm Văn Đức 君 (17 歳)



現地施設スタッフと打合せ



現地の少女たちとワークショップ



アクセサリー作りワークショップ(国内)



イベントに出店

(3) JICA 基金活用事業を実施したことで団体の成長につながった点・良かった点

JICA 基金活用事業を実施したことで、団体として大きく成長することができました。事業を進める中で、計画立案から実施、関係者との調整までを丁寧に行う経験を積み、運営体制や実行力が強化されました。また、大学生や留学生、新潟の引きこもり状態にあった若者など、多様な立場の若者が協力して活動することで、それぞれが役割を持ち、互いに学び合う良い循環が生まれました。国際協力と国内の人材育成を同時に進める取り組みが、団体の活動の幅と社会的意義を広げる結果につながったと感じています。

以上